

俳諧今七部集

上

中村俊定文庫

文庫 18

851

1



利根古名 丁知撰 一 二 三 沙鷗校
 いりり 崖 蒼 此 校 栗 柿 小圃撰
 抄 ぼり 叔 一 接 撰 表 一 勇 芭 悠 一 撰
 三 落 中 庚 年 撰

俳諧 今七部 集

東都書肆

万笈堂梓



今七部 序

手紙のし規矩あり規矩を
 ありて能くある事なるは
 是れとありて能くある事
 規矩を以て身ありて能く
 世に能く身ありて能く
 器を以て箱中の器を以て
 ありて能く好む事ありて

小哉立おけの堅何ほふあぶあ
様何まめさあう志ころる榮え能
いそんハ唯後唯ふ身かあふ先う能
能の字く七またかく能あう一おの
うらひの法則 お是と依り出
後は能のさ能くはと一と一調
のはさるをあらねと法法さるる能
は能く初学の能をあらねか 免古

今の三三親よりあう能く学え法是ハ
思案さるるあうかこのむ其準繩と
あう榮え能書の七部元録りのみ
何う今よりあうあある榮えあうと
例能能才子へ候年く子ら一と心
お能も七あうのうと能くは集能と
按くあうりあうをさう一能とさ
始能とあうるさうらみあ能のうは

多光豊白連る大降しすしとを
重なるもあすりの用ふあつて
聖納由誓ほつるを志るは

天保八年九月

幸舎書

序

時を得ていつく人々も思ふに
世の事もさすやけりも然れ夫の
すまふ一々此ゆればあつて
けりしんり強う又是も
峯も七巻先海ゆの御
のまゝも舟もと
いひたやしと記し
あつてさう一部
尤も其変化の
虚を志つる
あつて守光一人
あつて

二下

是をさすくた侮屈の清まぬさかこころもあはれ 又爰乃
有るり無きりうの化の世より有るる能くこの場より
ては汝が教一ころをほくまの樹をたては只の心を
以てあふり傳ふるのあはれは是をいひすあひの心
先世書ありて身信者も能くまの心はるる先世書
を極く愛化よりる能くまの心ありてあはれ
先世書をとりてあはれ教をとりて先世書を
かりて一字を如く合七部集とてし梓
能く家も能くありて能く

天保八丁酉冬十月

冬至菴

庚申



利根左京

近き年を徳の國部江口の里に庵修へり幻世の心ありて
おのれ美中をも括しめりて一うの心ぬるる能くあはれ
とて信守思ふを人の心能くあはれとてあはれとてあはれ
能くあはれすもあはれをあはれとてあはれとてあはれ
重の里の勢ありてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
とてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
乃信守子の事ありてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
精とてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
構の取の相もあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
とてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
能くあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

加へたる... 拾遺... 初穂川日記... 大車 八采

大車 八采

親睦社... 変後の... 小島... 花... 友人... 寺の... 人の... 娘... 薄思...

二部 川原...

世言 雑抄 九
二二
中ゆく屋の有り物を後つきききわのくを何れつとせむの蘭
あふもあふれずとてしれと子無んやとて一照とれはありぬ
とて何れ其修ふ屋の有り物とて思ふんといふをわが心あり具なき
の何れのなきくせつむり初とてまゝの心ありあてかゝるものす。
まゝにありにたりとる。

明もあまを愛せむとてあまをちとる
物相つとてつる 墙の 障り 下
路白く降り降り可 翳 啼り
日くあ 下日 矢とり 後ふり
かゝるくをきぬりききき月船
く居心所なり 秋 七乃ふ
糸襦の 質すきく 敷りともあり
小 圃
下 知
桐 兩
糸 木
小 叢
得 母
紅 月

おほく 字七 出やう 妙をせり
うを後のまめハもあく 垣明も
名 知

糸を揺りぬ

雀子や露風のあけのまき揺る
山嶺やと新言りとも 糸 木
あらうくともかすともさたり 浦の家
ゆきとちや何らともさるともさ
鳴すともさるともさるともさ
糸のぬくともさるともさるともさ
糸乃るともさるともさるともさ
吟降り小窓の留りともさるともさ
桐 木
江 月
糸 叢
花 叢
小 叢

二部 何れ 三

とまき也 竹の影を移しけり
とあるの中より竹あるはありきり
丁 知 得 燕

秋風 齊 貞好

大勢あはれしな夜をくむ也 危重
たふとくつきた地乃 吟 たら
板敷より竹の影の如く ありきり
るやも 善乃 竹を ありきり
まいくと月の出舟 ありきり
一たて 来たる 竹の間を ありきり
物多し 歩みし ありきり
竹をすか ありきり 竹のまきり ありきり
嵐 翠

同 修 時

青のすくまゆえに やまのり
藤きたつすりる 崖のありきり
市出しのまきり ありきり
備りし 砂より ありきり
けり ありきり
ありきり

茂 桂
丁 知
亀 山

修 江 幸 貞

森

今 藤 ありきり
義 乃 ありきり
日 ありきり
藤 買 ありきり

丁 知
出

あまのあまをほすおやに田うゑ
たうあひうらあきて時や杜の蝉
回の中や道ふとちりて花乃飛
てうらんで葉うたれをさるあふりぬ
草葉塚よりささきささきや柳の花
まゝ免苦乃ささきれあさき清の月
月のあま軒よりつぎうらまおあ
そそあひうらまうらうらやあけり
あまの聲よりけりてあまふら
かあひうらうらやあまの井の底
めりはききけり修する水鏡
砂よりやまのあまの刈あられ

燕 知 晨 之 王 人 知

あまのあまをほすおやに田うゑ
たうあひうらあきて時や杜の蝉
回の中や道ふとちりて花乃飛
てうらんで葉うたれをさるあふりぬ
草葉塚よりささきささきや柳の花
まゝ免苦乃ささきれあさき清の月
月のあま軒よりつぎうらまおあ
そそあひうらまうらうらやあけり
あまの聲よりけりてあまふら
かあひうらうらやあまの井の底
めりはききけり修する水鏡
砂よりやまのあまの刈あられ

長 成 八 采 得 燕 成

七言 新編 雑歌

七

節のかききと板乃実をくく
濱仙乃師範の跡をくく
御年のすまがたさすくく
糸うきく蘇や白のくく
簞て敷るやうきく
松たぐく者うたみく
逗留ありのむす先引く
瓜灸乃々うに集まき 額つき
鉢さくつきすけむき 杖らん
大瓶の糸乃延也あうき
車くきく後をたを新家
月の妹長村の人を置つき

知 采 蕪 知 成 蕪 采 成 知 采 蕪 知

神乃すまうとえさ後る 解 豆
四ノ市坊あうくく 文をうに
あうきく下部の孫立
あくやく鏡島の例を信たて
まのあまき 指乃あうく
青森おゆゆ乃うきく物
あんどー 梁お 室うあき
今めくね花を夜を年のけう
あきあけりあきう人乃あき
梅のさきうあきうのきあり
あきあきあき乃あき
あきあきあきう西の月

成 蕪 采 成 采 蕪 知 成 蕪 采 成

七言 新編 雑歌

あまのこゝろをたもてふ 秋の
澄みわたる空の如く ありては 雲
もたもてふ 雲 合 秋 兼
和やくとありて 秋の 月 雨
一時ありて 拍子 の けみし 海
もたもてふ 空の 雲 見を
もたもてふ 空の 雲 合

秋の 雲 雲 雲

あまのこゝろをたもてふ 秋の
澄みわたる空の如く ありては 雲
もたもてふ 雲 合 秋 兼
和やくとありて 秋の 月 雨
一時ありて 拍子 の けみし 海
もたもてふ 空の 雲 見を
もたもてふ 空の 雲 合

長成 得 花見女 せん女
あまのこゝろをたもてふ 秋の
澄みわたる空の如く ありては 雲
もたもてふ 雲 合 秋 兼
和やくとありて 秋の 月 雨
一時ありて 拍子 の けみし 海
もたもてふ 空の 雲 見を
もたもてふ 空の 雲 合

あまのこゝろをたもてふ 秋の
澄みわたる空の如く ありては 雲
もたもてふ 雲 合 秋 兼
和やくとありて 秋の 月 雨
一時ありて 拍子 の けみし 海
もたもてふ 空の 雲 見を
もたもてふ 空の 雲 合

丁 八 葉

あまのこゝろをたもてふ 秋の
澄みわたる空の如く ありては 雲
もたもてふ 雲 合 秋 兼
和やくとありて 秋の 月 雨
一時ありて 拍子 の けみし 海
もたもてふ 空の 雲 見を
もたもてふ 空の 雲 合

六 丁 得 葉 葉 葉

水、平の〜の秋のうそをあり
 弟ま〜もさうして〜る居るを
 けし解れぬは世に七事切つて
 おな兼用の抄をかくめる
 素のの隠もとり身はかまふあり
 うの冠けたる箇のいそれら
 標を〜とく〜の月
 沙無け〜の月廿九までつ〜
 けと〜の〜の〜
 きたり〜の〜の〜
 茶は〜の〜の〜
 ま〜の〜の〜

茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶

序身掛〜の〜
 あ〜の〜
 八〜の〜
 川〜の〜
 山〜の〜
 精〜の〜
 葉〜の〜
 日〜の〜
 逢〜の〜
 あ〜の〜

茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶

七言 未 村 山 居 集

あはれたうまきりし 里の出うつま
まう月つち物まきまきわあま
花のまあまのまき園ま すと
赤花すかままのまき花ま
藤まあまらぬ 桐 乃 書 月
若

合歌さうやまをたのまのま
まま魚の難まきまのま
持子乃りけりまのま
おまのまあま ちまのま
はあまのまのまのま
若 竟
要 五
得 燕
丁 知
八 采

さうまのまのまのまのま

吹ちしほあまのまのまのま
けりまのまのまのまのま
あまのまのまのまのま
あまのまのまのまのま
松乃まのまのまのまのま
門はまのまのまのまのま
けりまのまのまのまのま
里人のまのまのまのま
あまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま

青牛子
麻交
有月
平出
素樵
芦窓
里竹子
大布
起肇
松拳
清響

七言 木村大...

月と秋とくつりぬりぬり
あつらひてあつらひぬりぬり
あつらひてあつらひぬりぬり
あつらひてあつらひぬりぬり
あつらひてあつらひぬりぬり
あつらひてあつらひぬりぬり
あつらひてあつらひぬりぬり
あつらひてあつらひぬりぬり
あつらひてあつらひぬりぬり
あつらひてあつらひぬりぬり

草家 栗菴 九徳 一園 龜得 草頂 栝井 牧羊 一山 草院

見ゆらん花つゝももつゝ
花つゝももつゝももつゝ
花つゝももつゝももつゝ
花つゝももつゝももつゝ
花つゝももつゝももつゝ
花つゝももつゝももつゝ
花つゝももつゝももつゝ
花つゝももつゝももつゝ
花つゝももつゝももつゝ
花つゝももつゝももつゝ

七言 玉映女 章瑞 陽風 左嶺 和吉 徳圃 抱儀 蕙畝 松竹 其笑

二部 川村...

七言 新梅 十五

待秋鳴る思ふもよきも梅香
か薫りて空のまろくも不苗の
都市の子供、梅ふ小葉ふ都
秋の月すくく起ぬもそまろく
此ゆつたさひくもあゝあゝ
麦の穂もそまろくつてや子規
二月月乃 梅香もあゝまろく
月の梅月の梅中くけあゝ
歌船く平そまろくも
布つてもそまろくも
松風のさゝくもあゝあゝ
あゝくくと入あいつてやまの

壯之 篤至 二蝶 琴甫 茂翠 金芽 止足 花好 粗文 佳兆 癡雲

さひぬやがんとくゆはあゝ
ゆりさくも梅香も海の水すく
あゝくくと入あいつてやまの
くも月也とりとけくまろく
都の昔も梅香もあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝ
気をもあゝくも梅香もあゝ
冬は梅はよのかは梅香もあゝ
そまろくも梅香もあゝあゝ
書きつての梅香もあゝあゝ
ぬの月也くもあゝあゝ
杜鰲 芥子ハ

樹一 香月 春境 陶々 清屋 巴東 白記 瓦崎 茶静 苾阿 憲裔 平松

下部 十六

斗筵 卦童 李席 羊夫 吉良 西甫 北元 夫兩 道印 一様 了輔 對山
 麦の穂のつゝきたるる葉孫の
 昔の月のあけの光のさへ
 笑うけそ一階をくゞ字危れ
 あひさつを志あつゝ樹をさ
 山ありの細くけるや后の月
 ありらつゝ起るるれれれれ
 山里も静かき大の隙に
 秋の夜也出づる月の光け
 汗風が涼し具あつゝ大松引
 明月や赤豆汁のよも能く
 刈りてよれそまゝに本儀に

斗筵 梅窓 僕物 確疑 一具 何丸 碩翁 管山 大梅 一蕙 愿 楚産
 中夜うらやまあせらるる葉の
 松風をたゞしうりてさあさ
 りのあけの光のさへ
 花のつゝきたるる葉孫の
 昔の月のあけの光のさへ
 笑うけそ一階をくゞ字危れ
 あひさつを志あつゝ樹をさ
 山ありの細くけるや后の月
 ありらつゝ起るるれれれれ
 山里も静かき大の隙に
 秋の夜也出づる月の光け
 汗風が涼し具あつゝ大松引
 明月や赤豆汁のよも能く
 刈りてよれそまゝに本儀に

三郎 新編 下二

葉はくもや隣くさける山の水
 杉たき月何中よけり思ひきり
 瀧うけそ後よりあはれ言さたそ
 そあつついそおれた人の吐きぬ
 本標のふらききあふ井の志
 なるくしと傘よりつくはらうさ
 梅舟うの吐くまよりの小舟哉
 おほそら也控まわぬ梅の葉
 山のあは梅うたより酒色けり
 江乃折梅にあつたれしたるより
 折らまのほくしひくぬさつより
 山の手よりあはぬああり栗の花

石 鼓
 貞 梅
 風 呂
 久 臧
 旬 亮
 流 芝
 沙 鷗
 雉 啄
 徐 全
 白 桂
 一 兆

降一ひの海より居る居りうさ
 遠と先来たき也初観
 ありし一のけりまもあ核うれ
 糸百をよけく雲の柳め事
 去らうらもや物んにたのふ乙
 葉引るさの川らすう月共
 産物も核く栗を買よりり
 雲らきたころさうけ梅の花
 けくもあめ鈴や耳角うけ所生
 牡丹又と核く芥子又さすさ
 核折らるるうけうけ地
 うるりりもさるるさうよ弁よる

石 鼓
 貞 梅
 風 呂
 久 臧
 旬 亮
 流 芝
 沙 鷗
 雉 啄
 徐 全
 白 桂
 一 兆

けらつや意のお明の蓮の香
 花科
 子網ほ守門へちりて心驚るあ
 梅月
 傍をいさるるあしり利まふのむ
 天年
 算れくまこといさる梅もい
 南畝
 ろりやふらあまきれたるの梅
 万里
 澄くあま大寺えくるさうあ
 湖中
 昔の白片のあしり本所の華
 四明
 えりあま先枝きたやまくの表
 松保
 まるるのわうかうさう若の才
 田禾
 昔まきやまの昔のふりあうら
 盧白
 流れまき浮るあうたうまあふ

充兄
 花科
 梅月
 天年
 南畝
 万里
 湖中
 四明
 松保
 田禾
 盧白

乙るやあうり河すま其日か
 芝蘭
 梅の初る人りもあうまたあふ
 石應
 物をやめて足まは流す月お出
 窠窟
 ありまうりあふあふまうあ
 且松
 障りまうり嘘のあふあ茶
 酔車
 まのふら鶴のあふあ腫
 素琴
 ろあこまうりあふあ茶のあふあ
 岐月
 体命のまうりあふあ茶のあ
 兩輪
 海昔船を引あけてる月あふあ
 歌丸
 松折のあふあまうりあふあ茶
 唇兆
 有記まあまうりあふあ茶
 善記
 めの月あふあまうりあふあ茶

芝蘭
 石應
 窠窟
 且松
 酔車
 素琴
 岐月
 兩輪
 歌丸
 唇兆
 善記
 茶池

八木 其成 雲淵 蒼峯 龜山 藏六 嵐翠 夫萊 梢山 里秋 翠兄 茂桂
 其成 雲淵 蒼峯 龜山 藏六 嵐翠 夫萊 梢山 里秋 翠兄 茂桂

八木 其成 雲淵 蒼峯 龜山 藏六 嵐翠 夫萊 梢山 里秋 翠兄 茂桂
 其成 雲淵 蒼峯 龜山 藏六 嵐翠 夫萊 梢山 里秋 翠兄 茂桂

瀬 中流と月七節を七巻よき
 一 ひとし 瓦てんろくもん ちんまき
 湯をや尾くらりたる 船 杭り
 戸志中り七巻九巻起きし巻
 巻りま有りくさの 味もする二とるん
 観る多夢の 糸の 母たるん
 何とよむ 志 片とる 財とる
 つらひの 節々 ちんまき
 秋中を伊勢 秋 津てく 津
 半季代りハ ぼひ 竹の あく
 かり 豆七 たんらつ ねめり
 草 薈 控り ちんまき

八 菜
 峰
 公
 菜
 公
 峰
 菜
 公
 峰
 菜

秋 中 月 七 節 巻 七
 裏 心 も 巻 心 月 月 可 哉 草
 まがみりの 振りくさる七巻
 草 鞋 の 巻 人 交 巻 の 倍 先
 巻 け け け たり 白 の 巻 心
 ちんまき ちんまき ちんまき
 めつ ころの 巻 心 巻 心 巻 心
 あき ころの 巻 心 巻 心 巻 心
 巻 心 巻 心 巻 心 巻 心
 巻 心 巻 心 巻 心 巻 心

菜 知 峰
 菜 知 峰
 菜 知 峰
 菜 知 峰
 菜 知 峰
 菜 知 峰

二 部
 川 流

十 四

七言 和歌抄 卷之四

日記のうらり書から一たる
すたしくをあらうりおきし

得 葦

八朝の相織りけはきく一森の秋
 くらんく梅のむけ一香の交
 大なるもきく如伐らぬ月あり
 新風のけり心 湯う あらまきり
 新氣より海のおきも引さけ
 けけの華新 奥の夕 くれ
 事多お納 野の意の明物
 けりおしき 志まきぬ 豆 報
 冬の日た刻らたさこのおきさる

白起 八 葦 紀 葦 紀 葦 紀 葦 紀 葦

大工のきりきり 藤子 ちりきり
 とくしきりきり ちりきり ちりきり
 甲子きりきり 藤子 ちりきり
 秋のけりきり 男の老のきり
 あらうきりきり 草をけり月
 海のけりきり けりきり 押制
 けりきり けりきり けりきり
 高宮のきりきり けりきり けりきり
 掃除をのきり けりきり けりきり
 けりきり けりきり けりきり
 けりきり けりきり けりきり
 けりきり けりきり けりきり
 けりきり けりきり けりきり

葦 紀 葦 紀 葦 紀 葦 紀 葦 紀 葦

七言 和歌抄 卷之四 十五

すうとおりのふ 財を 買りて
は 秋するうらり 葉の 新くそめ
庭は けしきよく 葉の ときりきき
ちよきしき けしきよく 庭の ときりきき
初宿 初くすく けしきよく ときりきき
おあらんた 初宿の 葉は 枝よて
くまの 葉よふ ときりきき ときりきき
月あふふと 初宿の 葉は 枝よて
はらさあふふと 初宿の 葉は 枝よて
ふふれのおうふあうり 葉は 枝よて
おあふふと 初宿の 葉は 枝よて
綱元ハ 初宿の 葉は 枝よて

起 出 賛 起 誓 出 賛 出 誓 起 出 賛 起

静くくくくく けしきよく ときりきき
葉の ときりきき 初宿の 葉は 枝よて
くくくくくく けしきよく ときりきき
くくくくくく けしきよく ときりきき

起 出 賛 起

由 誓

葉はよふと 初宿の 葉は 枝よて
月よ 葉よふと 初宿の 葉は 枝よて
酒 初宿の 葉は 枝よて
葉の 初宿の 葉は 枝よて
葉はよふと 初宿の 葉は 枝よて
初宿の 葉は 枝よて
葉はよふと 初宿の 葉は 枝よて

白 起
丁 知
誓 出 賛 起 誓 出 賛 起

六部 川 在 卷 第 卅 六

そよよあまのこを喚ぶうまたらに
障しゝの折あし一髪も結あふと
象をふりまきすもよも通ひまのふ
波掃えとつうに冬へのそよよ
見たりあふとをうん終のそよよ水ぬ
石濱と月の後影の折しそよよ
ありあふとやうな時とんのだ
彩の影も四五終よすもゆりそ
釜を免すあふ時休のそよよあふ
板の旨も拭え人のする若の朝
移るそ移子ねつひてんそよよあふ
是おのよの帯責のきめゆり

記 公 記 誓 公 記 誓 公 記 誓 公 記

芝 花 の 伴 も ち り き 華 も ち り
本 の 子 花 を 終 る 筆 墨 を 寸 毫 も ち り
雨 の 如 き り り 志 づ け 波 合
さそんも気分持さるそよよあふ
時如のうけしそよよあふ 後 見
度 申 出 折 ありきうそよよあふ
風 の め り り う よ う 白 雲 蓮
折れあふときくそよよあふ
障るの流りそよよあふ
晴中う折れしそよよあふ
いあふとそよよあふ
船 船 舟 終 末 之 舟 入 舟 舟

記 公 誓 記 公 誓 記 公 誓 記 公 誓

七部
川
十六

七言 新井 源

おのちの暮るよき心 親 頼
大なりあつてゆくも 暮れ 暮の初
あつて ちつと あり 海は 朝日
寄入地の言は 花の ちかきり
ほろつく ちかきり 下りて 鳴 鳩
出 誓 丸 出 誓

丁 出

あけや ちかきり 只ある ちかきり
うはらむ ちかきり ちかきり の月
草花の 見の水の 待 ちかきり
あつて ちかきり ちかきり 連 架
ちかきり ちかきり ちかきり ちかきり
出 誓 由 誓 出 誓

あけや ちかきり 只ある ちかきり
うはらむ ちかきり ちかきり の月
草花の 見の水の 待 ちかきり
あつて ちかきり ちかきり 連 架
ちかきり ちかきり ちかきり ちかきり
出 誓 由 誓 出 誓

七言 新井 源 十八

主は如の如き一 粟七粒を以て
 如く粒の如く七粒を以て白粒は
 の如く粟より出する獲 六 粒
 六の如くと次場の用の如く粟を以て
 五粒の如く粟を引割る如く粟を
 七粒を以て獲手の粟を以て粟を
 八粒を以て獲手の粟を以て粟を
 九粒を以て獲手の粟を以て粟を
 十粒を以て獲手の粟を以て粟を

丁 知

為さしと粒の佛也多 粒

五粒の如き一 粒を以て 粟七粒を以て
 如く粒の如く七粒を以て白粒は
 の如く粟より出する獲 六 粒
 六の如くと次場の用の如く粟を以て
 五粒の如く粟を引割る如く粟を
 七粒を以て獲手の粟を以て粟を
 八粒を以て獲手の粟を以て粟を
 九粒を以て獲手の粟を以て粟を
 十粒を以て獲手の粟を以て粟を

下部一 川根 終節

三十一

貝壳 母けさ 底の あい 礎
 ああ へいあ へいあ 出る 未刻 りり
 けい あい の あい 生 葉 の 有
 葉き 七 啼く 母中の 母 あい
 せし りり と 母子の 水 り 流る
 うち 中 けい 襲を たら 福さ 貝 葉
 隣り 中 へい あい へい あい の へい あい
 母の 中 へい あい へい あい の
 母子 へい あい へい あい へい あい
 川を 裁き へい あい へい あい の へい あい
 肘の へい あい へい あい へい あい の へい あい
 足の へい あい へい あい へい あい の へい あい

誓 也 誓 也 誓 也 今 誓 也 誓 也 誓 也

葉七 葉七 つむ 葉七 先の 葉七
 へい あい へい あい の へい あい の へい あい
 襟り き あい へい 葉七 小け へい あい
 片 へい あい へい あい へい あい へい あい へい あい
 折り へい あい へい あい へい あい へい あい へい あい
 葉七 へい あい へい あい の へい あい へい あい
 葉七 へい あい へい あい へい あい へい あい へい あい
 ちり へい あい へい あい へい あい へい あい へい あい
 葉の へい あい へい あい へい あい へい あい へい あい
 母の へい あい へい あい へい あい へい あい へい あい

誓 也 誓 也 誓 也 誓 也 誓 也 誓 也 誓 也 誓 也

世書
新編
...

夏秋の蒼々をきき嘆けり
 ちと清きは帯ぬるは
 麦きりに志何の草鞋引と
 衣挽りは本社のあつらへ
 麻をぬくあつらへ川ようら月
 梅未とふりあつらへ
 手紙とめと書に
 人新あきと古籠 志へ
 日陽りちゆりいとあき
 志新のとささり枯り

田 誓

誓
 出
 誓
 出
 誓
 出
 誓
 出
 誓
 出
 誓
 出
 誓
 出
 誓
 出

節分の豆枝内徳をかきへ
 ちとささり 炭のつき
 と新井戸とささり
 株用ささり 暑か
 誓分ささり 古
 ちとささり 中
 ちとささり 米七
 御子ほろろ 板
 出代のすさり 縁
 ちとささり ちとささり
 ちとささり ちとささり
 ちとささり ちとささり

誓
 出
 誓
 出
 誓
 出
 誓
 出
 誓
 出
 誓
 出
 誓
 出
 誓
 出

三十三

七言 和州加給 三十三

水引を引くはまきまの穂や
 岩折にあらはれし何れもゆく
 急なれば中ねねおのふ時分
 平流の波は北へうすく
 舟に入交れば舟士の裏合を
 篠もかたかたぬるうくのうへ
 青うらーそかたらの志きぬ月の際
 竹よりゆれるゆいやまきる 梅
 竹のへ穂よりおろし江 柳 竹
 からまき持より 少はく六 雪
 笠の中へそらり見せに 振 葉
 胸のへ葉の葉のまききれぬる

出 出 出 出 出 出 出 出 出 出

来るはつきの役りよの 田あらしを
 葉のゆき 穂もまきむ 晴るる

出 出

探歌

かたやいふるたはらふ 探の考
 左折に新り 悠るあふ 大串と
 事するものよまきる 文 障りぬ
 給ねまき 柳の木の 骨のふくま
 美市に折中 流のりさる水

出 出 出 出 出 出

吾れ去る東のそん交をばははるもそまらま
 道のちまももむおつうらたうははるもそまらま
 ぶーあうりままのあはるははるもそまらま
 後手とまらまのあはるははるもそまらま
 の伴とまらまのあはるははるもそまらま
 はーあうりままのあはるははるもそまらま
 あうりままのあはるははるもそまらま
 了後の次をまらまのあはるははるもそまらま
 えたおーおまらまのあはるははるもそまらま
 をあうりままのあはるははるもそまらま
 とまらまのあはるははるもそまらま

雷堂 麻吏

一二二

西上人の影をまらまのあはるははるもそまらま
 もんとおほえおほえおほえおほえおほえ
 足中をまらまのあはるははるもそまらま
 ちねあまのあはるははるもそまらま
 了あうりままのあはるははるもそまらま
 のけらら杯盤杯盤の申あーあはるははるもそまらま
 されとおほえおほえおほえおほえおほえ
 ずーあうりままのあはるははるもそまらま
 を弟おほえおほえおほえおほえおほえ

わのしよあはれほしくなりぬはあはれなり
 酔はまほしきことすたあはれまほしきまほしき
 和らやほれまほしきまほしき

壬辰陽春

陽春人

あけしの夜も暮るる一 柳
 榎の毛虫乃 落るくちり日
 杖持来のあたりいりありあがり
 あたりと夜なりとらつきやむ
 さそあふく暮るるをえきさるの月
 秋のくちりの仕入 いちすね
 内方乃後につるるをを後 岸
 菊のちりあふぬふ 秋の引出
 くらけくちりふ船路のきつきたり
 梨のあふりのさる日中

沙路

柳 両后
 鳥津
 后 津 后 路
 津 后 路
 路

夏はきあまの子の運感承仇くま
の戸乃碑たをん志をかき
田子類の内産身ある冬新月
重かたみゆる葉葉居りしも
何前十月も出さうあまの泣き入
の初し居ふそのと還 伍
花さかり後者の塚乃人たかり
永い日あり乃後十年刻る
二の宛よりあくと離の氣
方りすくも七たふしあり
駈あくる猫身めらるる松乃皮
十九十月に雨り一日

后津后 后津后 后津后 后津后 后津后

縄くくくくくくくくくくく
二階下う志れぬ唾 聲
あちち喉とちち喉あま叔
者たさめたいうぬ 口あ
着るくくくくくくくくくく
ゆく先あくと遠りくる 着
茅はのりとれるまもあらし先
の徒思志似り寺又 執持
之るのせらたてけ懐くくく
生枯葉のまらしとくくく
霧の白気あまなる梁のくく
耕有合の細工日著る

后津后 后津后 后津后 后津后 后津后

三
一
二
三
三

七
一
二
三
三

七言 一三三三

新くら花まききつとらひつら
おれ見ゆりにまゝ苗代 津后

沙路 而后 鳥津
各十二句

而后

川口やまゆりあるり子
午刻とひし月も永ま夏の月 鳥津
とつきの聲を響かたてて 黄山
魚よこらおきたあけすもる
五月の影もおささる西明り 后
あゝ手紙をとり入る頼挽 津
恒縁の尻り海をこむお務常 山

簞笥お替りりつら一梳第 津
ちの中お山を故人よ扱ひ色 山
十九の元のをさるる大と 后
と都の殿と皇帝の治つと油足 津
霧もあつとつと育つと赤鴨子 山
まんまのたまぬくあふとる稀 后
二番たをさるつと七言料 津
お便り纏り起し月とまゝ 山
おのほりそ乃何あつとらり 后
潮風もあれて接らぬ花さかり 津
とく七指帯のほくく 嚇り 山
日の御子ほくらの月とあつとる 后

河にはあつたうき水 物いひのふらう遠く 路銀あつたけり月 作らふよあれたる ちきあつたふのあ 目信ふ案ふ湯具も 顔を利つたつと 大家うきあつた 帷子ききとて 母よりたのむる本 妻せ業成流ふ 糸今も此路の

津山后山津后山津后山津后山

みさうり坂根の中 腰り縫さけり 何うういふと 糖籠う一本置よ 多りり 両后 鳥津 黄山 各十二句

津山后山津后山

見らふ中しうり 先中りあつた 糖籠屋も園所 ちのさふ形よ

而后 沙路 后

くまぬおにまをさへ月のまけはり
子傳ひの味をさむのり 下 刈
調り 暮るるのまをさへ歩まはる
移るるまをさへの霧をさへさへ
音いささ甲斐もあまの片見は
まのつらまをさへて産後をさへ
お乃唯てまをさへ早も清まをさへ
古はまをさへり 霧ぬ火をさへ
下馬杭のまをさへりもまをさへ
まをさへり 海まをさへり 後いさ
ちよとまをさへり 節のまをさへり
まをさへり 庵乃ぬまをさへ 東 襖

后 后 后 后 后 后 后 后 后 后

空あいのまをさへり 花をさへり
舟の子をさへり 糸をさへり 三月
むらさきの雛のまをさへり 大遠の
まをさへり 少おをさへり 鳴
置のまをさへり ぬまをさへり 柄をさへり
村のまをさへり ぬまをさへり 不 務 手
入のまをさへり 水飲まをさへり 戸 棚 風 呂
まをさへり せんまをさへり ちりまをさへり
糸操のまをさへり 羽をさへり ハッ
まをさへり 畑まをさへり 切 襖
おあまのまをさへり 心をまをさへり 三 氣 お
めをさへり ちりまをさへり 妙をさへり ぬまをさへり

后 后 后 后 后 后 后 后 后 后

七言 一三三

七言 一三三

七言
一
二
三

子供元ハ西戸トナキハ内侍
たつたよあつて水よ尿す
腹切てらああれた終乃毛丸
はまもあまのりかけ終修但
燃さのあまのりいさる宮火神
くもりをあまのりやけらつて
かみ終てあまのりあ乃中
常々掃てうけら 青ぬた

而后 沙路
各十八句

后路 后路 后路 后路 后路

黄山

山寺の秋や見るとも菜大根
日暮あまのり月より移ら庭を
法亮のよらひんやうと夢中
あまのりあまのり本端かたけ
さあまのりあまのり終つたすり水
角家一斬中た起てあまのり
傍々来て身うらまあまのり本線物
何をほあまのりあまのり早うす
うらまのりあまのりあまのり雨

而后 沙路
山 后路 山 后路 山 后路

七言
一
二
三

何人をもみよまよあしうけ
 立つり医者の言口けまうり
 毎たし行しんまふ 怪 心
 有と業乃ほりくくをふま月
 本所を解く 性 勇くあり
 五十九の野立流りまふ乃末
 回高買乃た郡 別
 氣はアてらすふ安いさう
 願くし行しん行にみふ 出系
 去年より十日七早の二番州
 住者たかりそす中は 定 齋
 安ちかちとちふ尺えぬ 葎序風

山后 山后 山后 山后 山后 山后

間りあふ 葎のあひ 碓 第
 釈中くうふ義理を方を勤口
 行是を起り行しんまふ
 流の河縁にすふらた 初 録
 ありしと 止しん又 あふれ 障
 杖はけをまんのあふさ小坂あり
 よし似さう行も あふさあふさ
 油燈を起せありしを言の月
 述くしあけた様を 聖はけ 場
 坊のるを待てもあふぬを養生
 時より出りの候 持をひく
 五の六の星乃すたう意の中

山后 山后 山后 山后 山后 山后

七言 一三三

大向美りのかき毫いりて置
ち〜〜と花も咲〜〜と岸氷
傍のしつ片と檜ぬ 檜の芽

山后

黄山 而后 沙鷗

各十二句

而后

山を登る花は足さく時千巻を
家庭より舟をうつあ〜報を
籬へ枝をま〜おまよとちや
松木の根をよのきる 夜切し
出〜舟おすたゆつ〜と藪の中
冷〜鳴子のよふおと〜あ〜

山后 今 山 今 山 今 山

黄山

醜醜保子多供の庵の上きん
仕交〜す〜と志ま〜情実情
帷子ちけ〜文嵐雨乃係晴
寺新親江子新麦を 出
踏次い何〜志〜ぬ〜古以の
あ〜〜金の十日海〜
う〜〜と屋乃山根を引〜
お〜〜〜戸〜 来る
傍の啼涅撃の雪新雨交り
ち〜と〜法〜 種 蔚
月花〜茶盤〜乃志 公 髪
手水つ〜〜〜七日の出る

山后 山后 山后 山后 山后 山后 山后 山后 山后 山后

七言 一三三

七言 一三三

寒霧も散りあられを招ぬく
 ありし一真し七ねくる街を
 儒徒もよき禪もよき更衣
 十和りあけ花纏りくひあき
 書りし七捨の志しり別りの
 心りと書きしよきよの志しり
 涼明て来余の度もそ垣
 するんを路をとらやて 別
 十月の禪う智時よようたり
 片し合ひそぬ馬道のたると大
 飛躍系乃生保の根も有明に
 利系子さく出るく 流もつらひ

令山 后山 山后 山后 山后 山后 山后 山后

茶畑の書り七あきよけはきる
 園乃り糸のすくくり大川
 書りしけりぬく言く煙のふええ
 七ねりし是りのほつとぬあふ
 志つくりと五葉の味を昔くきり
 麓麓書り七あきよけはきる

而后 黄山
 各十八句

后山 山后 山后 山后

水満伝七書り七堤や書り月
 冷あたりかや芥やく真サ
 一具も万ややの飯海々

黄山
 鳥津 而后

二部 一三三

とくちらすくくあうぬるる
 市皮乃あさくは落る 芝之
 葉よりあやくく五位の照る
 赤色して退屈する仕立 船
 相所乃不思義い今もましく
 秋母子のいや應いぬ天宮押
 脊中抱きしつふれり 篋
 在形も持て来て居るもの思ひ
 余も又の依りぬるまんく
 依伏乃尾や有るは落る
 病ぬ先より肥る 穴 冷
 標傳し彼所の前七合也也

石山 津石 后津 山后 石山 津石 后津 山后 石山 津石

鳥絨よりよききた 柳の水うら
 護方事新物みくくく乳のそ船
 中たは五丁い青麦乃 中
 弱おりの麻よりあはれれをぬま
 高きます乳をちつと出さ 方
 しく海を七海ぬ一劇をつひく
 勢弱の手あしてさうとく 青
 花退り希有赤あし神戸頌
 極く通るわさり 引 あひ
 津山赤出たあし波くさくは売
 手中く業薩の若きあてあ
 返辞いひく物手とくもあ

后津 山后 石山 津石 后津 山后 石山 津石 后津 山后 石山 津石

阿 係 哉 を 平 中 の 中 に 初 め ら れ
 田 う 為 を 中 へ 入 れ ば 昔 秋
 長 生 う 志 々 々 に 嘆 け ら れ ず
 月 々 あ り ぬ ね ね ね ね ね ね ね
 落 新 り 亦 ぬ 籠 の ち ら り ぐ
 あ ら ぐ 通 を せ 結 せ ぐ ぐ ぐ ぐ
 庭 中 庭 中 見 々 々 々 々 々 々 々
 本 の 芽 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

鳥 津 芝 石 山 堯 寺 大 巢 津

百韻

沙路

退 屈 先 生 後 生 中 生 下 生 水 々 々 々
 巢 の 出 生 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 行 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 庭 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 新 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 柿 買 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 あ 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 六 人 七 五 人 々 々 々 々 々 々 々 々

而 后 后 后 后 后 后 后 后 后 后

七言 一三三

十三

そん利とむるの福とては
債無事ありた二玉をさす返
舟よりく神酒のちやんとある
のまて支干綱乃験の又と年一
回ら採のほし口ふり
面より多物さけて善の月
根を流る河岸のあふあふ
埜埜乃糊乃あめて去りけり
上強強々まきけり月えん元
欄初よりころり素うる月を色哉
夜半起すお七おのうち
世の中の社被治をり貴折る

后 后 后 后 后 后 后 后 后 后

鷲の跨るまは 直る虫 咳
十日程小まきい悟乃丸て落
おつ初よりめいすすかき 有り
ん右人の管のりあり 福以
丹く薬お 大 官
とあをらんある中より流るり
揚奴雲雀も 隠るは 吾に
りと中より 庵る藤お七喜らり 記
あ亦まきい安心 山乃よりり 記
揚あけの舟子の世の気ふり 記
とくかきもまきい 船よりい やつ
かふ初より辨つけいけよあぬ

后 后 后 后 后 后 后 后 后 后

六部 一三三

廿六

襦袢おし色 巨體ふくき靴
人の中 關よりをかりきやあつ出
ふみふきはあまの唯の字首目
たつて今夢みて直乃加く後
依以鴨あがり、あまをさるる之
入歯乃冬暖よなまき——
遠根つほけし——ろふま
手走肩より、あまおれ石糖籠
いづるし、あまうす推車しする
上役のあまきうろあま月う出
凍へさうあつ 候式 帷子
芋 ちまき 籠の戻りの馬糞あつ

后 后 后 后 后 后 后 后 后 后

斧のあまきり 柳 といひある
長俵のあまきり——晴より
暖簾あつける 矢 苦う——あ
寺子あつて——あまをたをり
あまあつてあまきりあつてけり
吹風と執りあつてあつてあ
あまきり——柳を入る 乾き 田

后 后 后 后 后 后 后 后 后 后

舊交あつてあまきりあつてあ
徳をと——あまあ人のあつて
いふあまのあまきりあつてあ
あまきりあつてあまきりあつてあ

二部 一三三 廿七

みちのく月々々序のとき
清く海へ せられそ哉 而 后

きり掃あき返り 乾く水き我
月うらすりと比ふおし 乃更々
あけの福をせむく 掬ひあて
葉代をのきる 盆乃 所す
まふより 砂ふきたる 松をきし
ふふふ喜降く 字のひしりの 啼
たしあひのふん戸板ふす 産け
あきんんくけ 古きあし すす
梅金々たすれ 七風おとひき通
たふのすともいけぬ 山とす

沙路 月庭 黄山 加松 我竟 桃鳥 大巢 芝石 金蕉

定宿の酒屋は近のよありあり
朝の下すそつふり 此 降
身傍より了 菊のけく後たす
涼のうらと 四つ七 赤 膏
梅堀乃ちらく けの月 月 晴
投あす 豆をすたう 也
歩仕あし 細さかひの 花 本
何乃たす 中々 意 取 永 日

鳥津 青可 五風 梅裡 李暖 臺汀 呂川 夷仙

かきあし 糸返り 糸糸 中々
かきあし 糸返り 糸糸 中々
けしとみえり 糸糸 中々

四のいさゝか磨美の顔かき
くそくあり其白
はらちし交さゆき海まき草野
を連て来て戸明もぬむの庵
家のくくく一静、雀の名綴る赤

燐 岩

能能り不易は流りのやりのあふて妙を如くせ世よ
循環するも能く季節のあはしり乃岩依調ふうつ
里いさあくのりり流まといへも早竟花をこのま
實哉らむのそらあふんう只花の胎をよんそりぬ実の
あふんをたのしむたのま実り回志の流る終てあ乃春
ゆあゝ若砂のりりりりかひひりも能くしたる能能り
彼実をいんひ得りこらん哉たのし中夜あはし是と云
ありけりあむも事意あはし色たわく梓おのほきよのし
すむるも能くたのし浦人業業

癸巳暮秋日

二部

燐岩

一

蒼乳

やふ入りあき通るや 古樓
 ぬらんて水乃あき通ゆる小田
 半時色は何れともあき通ゆる
 うきよりたるといふは乃 梅
 乃月よ更なるを引片は乃 舍
 火をたぐあはぬの早くあき通る 益隆
 毛見幸七と氣やりに仕るたき 隆乳
 いらひたきしと云ふ 雜 隆
 町内の古橋て後集をいふあり 通溪
 持備よたるむ故屋の部と隅

南溪 芥舍 梅通 舍 益隆 隆乳 通溪

筆もやあきとささるあき教の出
 美ふと振るもをあきしすの
 大分より歩きの月もあきし
 籠 喉はく布よとぬあき凍
 其果其骨もぬたてらる古侍集
 雀目あきとらるはあき半 櫃
 籠よりあき紙布もあき通る
 たる雷もあきけりあき
 けぬけも彼岸のうきあき
 りけや 子身てあけぬあき
 らあきりあきとらるあき
 納涼あきとらるあき

舍通 溪乳 通溪 隆乳 隆乳 隆乳 隆乳

二部
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十

大福も目申よとむる戸のゆるみ
 あらうて見て七つうぬく肉
 腰もゆるゆると後遣の屋中も
 布あらしきさをかき守るこ
 人の通もたけいお菓を押しけい
 湯茶のあらしいたのむく色の月
 引板も七色の星とぬりり
 買うくすすりの星もき 籠 壺
 水のともなきりさりと掃出も
 風をそり申割の左敷もえり
 たんくく白りり春のたつき 芭

隆舎 隆溪 通礼 隆舎 礼通 隆溪 隆舎 通

店か〜花の間り〜らす中お
 紐 湯 後 乃 たち〜 春 さ ね

隆 草

三月日〜〜田り〜〜 務 我
 北のゆく〜〜の〜〜 北 け
 義入の馳 走 ちつ〜〜 ぬ ち ぎ
 花 花 けら を ちつ〜〜 ぬ ち ぎ
 田り けら〜〜のときぬ月の秋
 水引 弟 務 大 河 麻 鳴 出 中
 或云人 徒 生 を ちつ〜〜 ぬ ち ぎ
 ゆ〜〜け 城 仕 出 け〜〜 ぬ ち ぎ

隆 通 南 通 通 通 通 通 通 通 通

梅 通

十言
いふ
三
あつらひしつらり海園のよりり総
別家元中々も世らり一節を
初戸子あつらひしつらり寒道
蹴あけの泥をとり守提打
あつらひしつらり十年まの虫踏
あつらひしつらり栗の初め
あつらひしつらり兄ハ給早も若き
あつらひしつらり土桶
あつらひしつらり花も咲
あつらひしつらり安良海を見ぬ
あつらひしつらり小転時
あつらひしつらりめさるふあつらひ

溪通舎 溪通舎 溪通舎 溪通舎

あつらひしつらり可老めり
あつらひしつらり月
西国ハ海交りあれを造り
あつらひしつらり暖
あつらひしつらり室乃らり
あつらひしつらり茶
あつらひしつらり買
あつらひしつらり宿
あつらひしつらり月の色
あつらひしつらり箱乃ぬも
あつらひしつらり捨り
あつらひしつらり

溪通舎 溪通舎 溪通舎 溪通舎

菡萏をいきては解たはらうくお結をかり
忌日の外は鉢もたたくさぬ
朝晴れ花もたつらうもちあふ
子供おもひまの葉とつむ

漢通舎漢

晴月の末ふはは花ひる

南漢

汲合お水際うちて東屋つる
ありたるる夜に北へともか雁
種蒔よやらのぬ人七着とりて
彌暖さ蓋のけーりちり
降る末るるの吹く朝の月
あはぬ所を運る

梅通
荇舎
漢通舎

刺してはく何その晴の引おられ
あそつて苦うん 葉湯乃順
法儀の蒸子 ちやさぬ孫也り
一了管り入まー 廿一房
おのあとい二廿おろく蒸多し
ちや 桐の葉もつけさぬ七る
こまくくろく戸あす月あり
降るちよこは具えぬ足り
就乃あるるちの手織をちて通
街のききすちく家かりと出る
四月へ毛かりとあるるちあふかり
操中々葉終てちやむ紙汲

漢通舎漢
漢通舎漢
漢通舎漢
漢通舎漢

七言
七言
七言

春先の時を契の風をかぐつさ
すもつ勢をもち能置なりす家
族扱をす午を先様もたすきうけ
借と丁難を何をも養うまぬ
程も乃扱のそふ移る小原呂交
志手起り半の首あけてくる
いりもより早う豆腐を焼付る
今より菊やうぬ富士より回行
月のはす守好庵よいそを古布子
のほりいありり元後とさす
犯舟もむさう 函をぬ番取前
あるもあはぬ風のみささぬ

溪通舎 溪通舎 溪通舎 溪通舎 溪通舎

侍てあり手形一まの書すあり
弟舟を心懐のときくる 餅つき
奉教うらまぬすりさう病ぬけ
ち多く花七みゆ馬場先
鳥の巢をさかき宮司乃小侍
そらひ庵子のありあやうま

溪通舎 溪通舎 溪通舎 溪通舎

春の部 叢白

立 喜

一章すもや 朝日の福来り
門きりけさうあや小傘

蒼 虬
うつを

七言
五
六

折りつく層極を一日白ひたり
 右箸のふもや梅もすれとん
 門遠ひ志終すも茶ふ礼者哉
 珉らしやまゝの青の小梅灯
 ついできて初日出あはれ二日う
 けふくもあはれおひと初る部
 馬さかりや衣桁もあはれ後ちじ
 ねつけや万支ええてねおあける
 万支や神もまふさ乃く
 猛曳のあまきり裁り小津う那
 世たらしきり買是して茶も蒸う茶
 程い手て揺りぬまや俵の産
 意志 梅價 荇舎 朝陽 鳳朗 南溪 而后 干崖 丈翠 梅通 杜馨 禾木

掃くくち吹人よもくをる若世哉
 松曳た手終ひて出いりもるり
 てもやこくさかぬり後や松の内
 鳥津

梅

あけくもやまて月のかり梅も花
 暖くのと那もええすけきの梅
 梅もまうまうよやや縄すれ
 神の中もやうてまもぬや梅も
 後もあはれ田も茶もや梅も花
 折るも七ころもあり字免のたき
 折頃乃こてあはれか敷りぬ
 月底 布蘭 梅通 煮苴 荇舎 万菘

柳

往うけに見こより青き柳哉
新降ふの枝もあはぬ南をよ
草掃くすね生えおく柳かな
鞠場うとあまし紺衣の柳か
松指りりおとするるる移り那

一樓 鳳朗 蒼乳 瓶山 芥舎

あやうきも也隣ふ後守董の鳥
上野をさしと移りるる春乃さ
ふ奥也その心お守網のさし

芥舎 馬良 梅通

うらみす也近くくさ影お井し

日人

学

美多き女志といあるけを川さゆる
学々々見気をおぬ存よさる喜う余
守具飛あやゆりさるる乳ぬ森の中

流芝 梅通 梅守

学

暇ありあはも田うたの人やもつ鹿
あささささささささささささささ
柳乃柄七かすむしある女堂体

南溪 今 太令

細歩の尻つああ守日くさささ
あさあやあさあさあさあさあさ
踏くのもあさささささささささ
師の尾をかえささささささささ

蒼乳 兼取 立分 北築

七言 柳

ふるまゝ衆乃帝者よけたり堤哉
轉めし水問や門をけり了雛子
縁をしはるく田の中やあく桂
あふあさに董すまけり小板橋
をあけぬ手りしとさ守橋木うさ
蒼胤 南溪 六英 蟻兄 青可

内海へそらりとせり 春好月
傘程り出せあつたりや春の月
田あしと棠よきいぬ有や春乃水
美方と成てけりるや春好月
春のゆや泡の流るる葎乃中
たる雨や萌つ寸春好月の芒原
南溪 自樂 卓池 益隆 士馬 鼎左

吟し志中ふりのふれ 出草
おもしろくて水田うらうらと出草
石鼓 月華

あふはす方のあふれとす川
くちみたる木のあふれとす川
つたりの美見してさるる春のけり
あふれも清あふれとす春のけり
花の赤やけり終消るる也 岫やうら
何れもあふれけりもあふれ夜乃をさ
あふれとす踏ちりしとす春のけり
あふれとす踏ちりしとす春のけり
あふれとす踏ちりしとす春のけり
あふれとす踏ちりしとす春のけり
茶田 西月 波文 萬丈 芥舎 組郷

七部
九

七言

歩た獨花たけよそあうりたり
花の間けさきり中し移はらら
翠よりあま月さのうきさ山さぬ
つらまへて顔すまきさる梅可事
初より中へ梅かうり来る梅り来

砺山
斗丈
蒼乳
梅通
豆隆

梅ささや 春さる雨七浪よあ
屋少屋へあ身世あやの結あ
手細より唯々 念あり梅の花

鳳朗
若稚
栗哉

連翹や掃てかをよ守備りあ
連翹妙舞の結あ川かたり

芥舎
梅通

あしり止を際りしは田原うそ
あ宮あから管若くさる田あ一卦
帰るへあ貴花飛さる日ありたり
出代あさへえあさゆるむう川岸

寧巢
福采
有月
卓池

神屋しおもあ伊ある波子うそ
山ささるり浪呈うさる瀬子哉
甘只あ京の料理や夏 漆

素志
梅通
水竹

あまひさるりりあえけや若草や
あま大堰川おの若草たよええ付
あまえん袋の下にあらさるり

蒼乳

七言

十一

七言 三十一

くう あんり

同行

あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり

梅通

夏の部 夏白

首 夏

ゆふを成てみくけりきり記し
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり

久城 月城 南溪 史千 大郭 野湯

芳英

あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり

芳英 本道 麻衣 南溪 沙路 号豊 江月

牡丹

あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり
あまのきりあまのきりあまのきりあまのきり

夙也 抱儀 梅通

七言

あまのきり

三十一

花種より糸をちよぬほくす武

杜若

いよ〜あり成ていふ種守杜若
か糸のそ〜世をて常糸たふり

郭ノ子

三日見ぬ木の香透す子規
け〜〜糸をゆ〜屋〜や〜尾〜し
お〜種をけ〜と〜く〜け〜〜
や〜〜尾ぬた〜の中や 蜀 塊

端午

井の若き紙飯あけたまひ草蒲
湯お中〜はれをあ〜るる扇か

芥舎

梅通

菱香

林芳

艸方

梅通

黙池

侯齊

團欵

和〜草有り〜糸二合と紀あやめ
あ〜〜せ〜の守日とあ〜若子ら

芥舎

杜蓼

作杯〜〜掃〜〜お〜や 鳩牛
河中〜に〜度〜はあり〜と〜

今

田〜名

榎新〜糸〜〜種守杜遠〜田植外
葉の水も田〜名子同〜〜れ外
種〜同〜お〜都〜〜侍宿〜お
〜〜〜〜〜や田植の名〜〜
〜中〜〜名〜〜〜苗〜把

百池

貨僕

茶静

夙也

梅通

〜〜〜〜〜は〜見ゆ〜馳走取

菱乱

三

〜〜〜

三

採る先へ朝日のけりや故きう屑
うらうらうの空をへちまをさす故き
とほりうあふゆの又元守鶴を
二部と三部をたけむりや
大天たつもの源一とを移舟哉

五月雨

かきあつうりおまはちのやまの
ふりかきし〜ぬれ五月雨ア
はまたきも言う晴口や子乃泥

日雇等の道ひ守る水鏡哉
是のこれ死走〜のち帰る

風 朗
湖 山
文 叶
角 洲
芥 舎

松 疎
意 志
風 也

三 隆
四 明

端〜と〜〜つ〜苔〜
朝の宿り日のでる守ははか
水青やゆえ〜瓜 び〜
夕鳥乃あははあ〜田のあは
ゆ〜あ〜あ〜守〜
夕鳥やすたき〜ち〜
峰のおけり〜
杖う〜

抄るまをのま〜
門す〜

梳 鳥
我 亮
南 溪
万 衆
沙 路
蒼 靴

南 溪
梅 通
芥 舎

け免て見まは夕日の中や尊
るやのちう乳臭く志う
蓮葉やあふ才庭多し秋乃ち
伐たさうり秋うらまをす葉花
あふをたも秋うらまをす蓮見葉

大梅

梅通

一嘯

梅通

葵乳

秋の部 發白

五枝

血乃血うしゆをさうけてるの秋
うすも帯あめてせき之を秋の秋
多知ての帯つらうやけさおあさ

千産

芥舎

南溪

日中庭のつる言やを相一
去つらうと涙うあうつらうあう
葉乃朝や秋あまの秋乃秋

今

子行

省吾

七文

星今也門因のあを具り年うら
こ秋うは海うのあうや星葉
街をのほらうもあうらうあ川
携了たをの買方多う天乃川

喜話

芝石

南溪

葵乳

孟蘭盆

迎ひてや秋風たうらう人通
あうつらうあうあうあうあうあ
麻衣のあう人あうあうあうあ

素志

梅通

南溪

七言 山花 十一

大綱もすたきくしあはる海へ
はく鏝やいづれしやうも素志
今 蒼乳

草花

井乃新より横たをうきり女命
たふあふありの笑をよあふぬ花
三 葛 南匠
池口可とすおあうり花すし知

塙路のあつとえよたり無乃ゆ
埜路や務もおほくしやうひ町
伊 崎
たふあふありの笑をよあふぬ花
丁 部 黄 山
稲葉や雨おほる窓のうけり
芥 舎

月

三日月や土まふりきり手のあふさ
三日月やいざ刻たふり云あは
梅 通
侍をすしつれあし

月早し今方のさうり花ぬりち
素 志
うらなれぬ乃とこしきさるるあ
りなれをす志し

井印のあつとえよたり無乃ゆ
あまのすしきさるるあり云あは
芥 舎
南 匠
名月や作らぬ人の笑のうけ
小 圃
山越しまあはる月乃出たふら
貨 僕

二部 十一

梅のつらき雪の跡に月見のふ
みけぬえしよのこぼれあり月の色
換すそとと粉の月をむ夜半我
とやしおす能人の道も也門の月

梅通
一宵
西月
朝陽

ゆき形もつらき雪の跡を梅寺
静けしけしけ月も去や小田の産
おそくあつやと風の夕をさるし時
日のそらりて冬初る秋の終る季
月影へ出せんとや世々の秋のそら

素志
夙也
梅通
桐西
梅通

三葉

まぬくも湯顔乃草や三葉のむ

蒼軌

ゆきりたりしちきありて三葉白ふ
葉ありしちきありて三葉直の門
川らして三葉のあやもや油たり

太老
眉岳
祇白

花より名刺の本れも梅を
園より手入乃とあぬもあふ
はすありわひ人の道もあふ
らんあつおほく

梅通

紅葉

るしおくもよあさるを
細く色と影に葉ありあふ
後ありの庭九子みゆるもみち

万葉
獲物
芥舎

花つよさハ蒸るはうらうら香ししわ
氷氷や、濁るれはるゝ蒸乃手り
荇舎

冬の都 蒙る

初冬

あさくくしと送うり吹きし雪月共
よき家のたぐけやあはれがけ
赤門乃すもあはれ冬野哉
深や梅のささ木さいたの
本移り舞う家あはれあはれ
扱待のさきくすよあはれあはれ
くすあはれ口明きけり 瘧 瘧
梅通 梅價 唯草 夙也 荇舎 今 時竜

あらき

御も首のさすさかやさうししれ
書本ハおろくさあす あはれうす
あはれさくはたまきえてあはれあはれ
蒙の徳さかやあはれさく時雨アさ
おあはれさく人の中あはれさくさく
荇舎 今 南 李長

茶屋

ささくけ水ハくささくさく時雨
アハくさくさくさくさく乃 板ア
ささくさくさくさくさくさくさく
小口たけ板は長花の山陰
荇舎 得蕪 茶屋 胡陽

七言

汲水の水ほくくたり 千載能都
態勢不別 竹ゆる 重衣 ねく 赤

今 梅通

けしき事十つく 千載 千載 焚埃り
あごそそて 夜はよ 出る 梅
水仙七つく 出る あり 蕙をくけ

盛年 寸外 千輅

消さくく 一り あり 冬 乃 月
出る けく 噴て あり 之 網代 寺
秋の あたる 春 あり 乃 冬 籠
冬 あり 乃 小 菜 引 あり 出る 乃 乃 之

青陰 柳谷 南渡 梅通

くさくさ あり 春 通 あり 冬 乃 乃 月

万葉

降つる 朝のめつ あり 冬 乃 乃 月
夏を ねく あり 冬 乃 乃 月
後 あり 冬 乃 乃 月

初を あり 冬 乃 乃 月
冬 あり 冬 乃 乃 月
松の あり 冬 乃 乃 月
お あり 冬 乃 乃 月
冬 あり 冬 乃 乃 月
梅 あり 冬 乃 乃 月

芹舎 虚白 万葉 素志 梅通 南溪 俵山

七言 あり 冬 乃 乃 月

七言

掃ちて新産やつふき小舟をちる

蕉夢

笠踏てあく荒原の千鳥哉

蒼札

何やくやふる雲外を啼きしる

金菜

静、はひ知る新しう人の羽音るれ

梅通

ありくともえてくぬや響の床

斗史

燦掃也柳よふきるもらひ新

南溪

菊の出さきもすもこすもこすもこ

芥舎

生筆試引すうけや年の暮

今

田の中は雑子つらうし事能くれ

荻札

舟りちらうちをゆもや年の暮

梅通

芥舎

麦秋やあく入路の海の上

柿のたふちる、ハキ乃、あき

蒼札

あけの横やそ袖を泣けやをて

南溪

とらうり産へおらまはり娘

梅通

布子も若う葉もく度る音能月

札

いりももおそくくつるおれらひ

舎

角力場の伝もそら、其葉の青を

通

細石のさす小籠を

溪

二三儀米とも後よありけり

舎

瘡おこしり川くともひ

札

二部

つらうち

計九

風のまほさひりき 菽 近 取
かこり成てもきほののきぬ
まらぬたけ于湯皮中て同い合を
まのりあろり 梅のき 拭く
横町のお旅さかり乃く通り
あおは五音のおけらめく 月
月すきあて花よ赤る白蛇細
あうりまへりりすかー風台
か子さるる 庵の月せきさる
まのりあて 肩 入る 馬 士
あま果りり 子まのつらて門もさ
何さあもこのおあしてあさぬ

舎 礼 通 溪 札 舎 溪 通 舎 礼 通 溪

案舟へらりそり 舞の 肩を 積て
まのり 相織乃たけをけや
信るまのうらめ 舞さほさる
めさや 障 糸の 念もあさる
初る来る魚を 隣てさああり
尾の下をけらる とも せ
仕合と 通 路の 月もさる
釋おふ他はけさあさる
さしと 舞 春乃さる本さる
借家のその 孫も 見てや
喰中うとあてさる 葎 骨
肩を越たる 飛火よるあさ

札 舎 溪 通 舎 礼 通 溪 札 舎 溪 通 舎 礼 通 溪

茶さけたのぬれも揚ぐけし
午刻くも出た雲あつる水音

通 溪

白雲より眉をさうめ感情は海のうかむの御座の
勢も交あつたりあほいふり炭石いふを記とて
雲より揚ぐりお示すくはあも中た御ありと
はひよ此舟も新船号といふありぬ

天保四年己の初冬

梅通識

栗柿集序

ある人柿の核をふきとみ候し家の縁にふりて
はを種まきとて実をふり候し秋の夕日に
あつたるちめよかき種をすくはてお出せ
はるるあり候し一箇の栗を植ふにやとつて
たてて必実をたすあり候し聖ありと
候しお候しつとありとよめる歌もある
かきお候し柿をさくある人いふに
玉へえはちありぬ候し一栗を
あふ候しつとありとよめる歌もある
又落はといふとありとよめる歌もある
あるをさくありとよめる歌もある

あつたふと心まゝに感たふにいつ年ものあふれを片とぬ
別れしとそよそよとて泣かぬとせしむるは思ふに
俗世の何そひも此事ひよとていつ評者の即決をとて
度よりいし獨身を日かつぬかの世に世に思ふとて
りて世の後はたのむる其趣をかまゝにゆ程をよむ取
た那ーとあつたりあつたりあつたりとあつたりと
柿栗の同答を板のうへにあつたりとあつたりと
とあつたりとあつたりとあつたりとあつたりと
あつたりとあつたりとあつたりとあつたりと
あつたりとあつたりとあつたりとあつたりと

随風 庚午

我家の家々一入は文章の柿栗の本柿栗とあり
り実乃ふけりあり一年の家の内をそのついで
字は合ふのそか左隣の家のよう柿栗を合ひぬ文
士の思ひ来し栗代合ひ娘を落しと我指つらん
長りたりとあつたりとあつたりとあつたりと
とあつたりとあつたりとあつたりとあつたりと
小圃くくくくくくくありしうけつらんのたをさ
あつたりとあつたりとあつたりとあつたりと
あつたりとあつたりとあつたりとあつたりと
あつたりとあつたりとあつたりとあつたりと
あつたりとあつたりとあつたりとあつたりと
あつたりとあつたりとあつたりとあつたりと

まらたのむ樵の本をさく明くは獲ぬ依後手話の中に
の森の傍に置きたるけしむぬえをさくかよひのきり
深き人のいふめきと行基星隠乃一坐杖をを極する
用ゐるいりしと守つる粟の本もあつたかく深む樵の
本もあまを海の傍に中おのきくおをよんと飛ぶいさる
ふゆいさるの樵も愛風吹くまゝ屋敷に粟柿の實乃
ふはりあまをさくけしむたのけりきり

小圃

たりかきく海買ふ二五十々くれ
戸乃明たさるりす終る新頭 木
あまのさるぬさる燕を 保るさるん 圃
あまのさるたさるり弁市の阿と 木

脱あまらたむ美のり月さく
腹乃あまらたけしむの森のお
村中て美さるり馬
歩屑のさるり 後 圃
常よりいさるのさくらぬ 冬さるり
痛く里鬼城さつる古たか糸
雪新口はりり 廓乃 明り表
いんきさる 傘のさるぬ 吹降
汗さるあ思ひさるの時りた
水櫃のさるり 尿 籠 又出寸
えらりや門さるりす突の後
左那を頂上 月元 頂上 木 圃 木 圃 木 圃 木 圃 木 圃

二部
二

幸々中々壬生念侍のひききり
 妻おろしき多はく編置
 職人の居るは足元脱履
 さつさくさるる宝式の判
 在居居の終り客より出出しく
 多あり青おろし能き数あり
 夏をやれた冬々寒く思ひ
 仮のすくくり雲烟半盆
 山居る千位のちよと啼轉
 尾をからけき傍りてや呈
 恰好し賞目のりかき草つら
 洗を挿おろしおけりおく

圃木圃木圃木圃木圃木圃木圃

ありくくをさくくさくく浦の月
 五六羽略のいし時うたの
 未極くころきりきお葡萄棚
 車右のちよとすんたあうり
 熱鎖を生得送者々不徳性
 ちよとすくくえ癒けくさ
 此解大け那一本あお花乃子
 せあらしき啼くくさくくりく

圃木圃木圃木圃木圃木圃

小圃

文書をくくし居るおるかきり
 山根ありく交すり青の月

桐西

二部
 二部
 二部

のけい置洗濯まの鯨のし
二階けい子成りくる 呈 青
さき子のおとれたるのちも
も時すまあつとま物乃
味物あしの手成なりなり
何もくまきまなり人手の
つくたを誰まゆきと意成し
海春りのころ 島崎乃
有明なりあつと月さ守熱後架
大工乃 菜なり 鯉 買なり
ゆきとあしとくくぬ秋なり
物火つける 舟乃 神 棚

西圃 西圃 西圃 西圃 西圃 西圃 西圃

あたしといふ籠の蓋成り
味なりとくく 赤玉の 用
なりあつとくくつとんを
千部又咽のつとむるの
晴くはくくくくくくく
あまけけ 汝乃今の存ふさ
庭身成一同くけくく平
海の成りぬえ 生 産の
西あや 百毛成りぬ 大云十日
張り多 多交 多果 多 多 書
縁つらぬあつとくくく黒本
病 瘵 持乃 於る能 切る

圃西 圃西 圃西 圃西 圃西 圃西 圃西

大工乃 菜なり 鯉 買なり

四

葦 孺るまきけり 起るたふし
引き舟まの春あつきむ 若權の家
厚け梅のあそりし せつて家哉
今まの 時やとる 孺るて 遠下
小教さくあきと吹き 秋 此 冬
初段のあうきさあき 向く 郷
山 岡 秋 初 登 初 也 通 り 葦
親 船 乃 弟 母 へ へ 初 子 へ へ へ
おさ へ 後 の 後 へ へ 橋 在 へ へ
一 垣 の 柏 根 初 登 つ へ へ 序 へ 我
菊 羅 へ へ へ へ 九 月 十 日 へ へ
張 菊 也 寄 へ へ へ へ の 隔 へ へ 芽

雙鳥 可大 荷少 貨僕 敬齋 雪簫 西堂 春駉 素伯 木葉 鹿太 芽丸

若 笛 や へ へ へ へ 秋 乃 夢
以 秋 去 へ へ へ へ 飛 へ へ 襦 濱

可布 曉 河

春 小 仙 へ へ へ へ 夢 の け へ 免 系
へ へ へ へ 夜 明 へ へ 斗 乃 子
川 秀 乃 夢 へ へ へ へ 枯 尾 花
枯 へ へ へ へ 夢 の へ へ へ へ 尾 玉 系
水 仙 へ へ へ へ 夜 舟 へ へ 那
蘇 米 の や ま へ へ へ へ 花
能 後 治 へ へ へ へ へ へ へ 夢
桂 々 れ へ へ へ へ へ へ へ 夢
初 へ へ へ へ 寺 百 姓 へ へ 冬 へ へ 夢

斗 遙 久 滅 昇 左 四 明 一 夢 多 代 麻 交 卓 池 應 へ

七言

門川や水をくく柳の瓦
 聖志をなす一日風や
 鴈の啼柄具あける小鴨
 ちつちあやそゆうまの工
 ききうあつんありの降る
 夏ものより涼はさきや年

黙菓
 小柯
 徐全
 大柄
 再月
 三首

待よりえあふくち中
 をつきの戸森のまき
 みるあふり雨ちつき
 けのちけえあきあけ
 幸あけあふりうつや
 法をよりぬきくまき
 ちをけやあれ所りの
 山水やあふりまき
 ちをけぬぬりまき
 ちをけぬぬりまき
 ちをけぬぬりまき

江月
 素衣
 露谷
 磗嶺
 夙也
 叢
 茂推
 沙路
 龜得
 八采
 蘭所
 恭里

七言
 山行
 六

細く掃く如く送る月あまの暮の
名四か本堅修の志くけけ
橋より一層あまの志くけけ
畠あまの志くけけあまの志くけけ
橋ひらけ月ひらけあまの志くけけ
烟あまの志くけけあまの志くけけ
家あまの志くけけあまの志くけけ
人の志くけけあまの志くけけ
山中あまの志くけけあまの志くけけ
暮あまの志くけけあまの志くけけ
長きりあまの志くけけあまの志くけけ
雑の雑あまの志くけけあまの志くけけ

梅裡
暮
卦
蓬
七
虚
杜
惟
星
祇
一
東

傘かゝる出己まの志くけけ
花財の志くけけあまの志くけけ
山あまの志くけけあまの志くけけ
清火あまの志くけけあまの志くけけ
隣あまの志くけけあまの志くけけ
春あまの志くけけあまの志くけけ
子あまの志くけけあまの志くけけ
吉あまの志くけけあまの志くけけ
官あまの志くけけあまの志くけけ
妙あまの志くけけあまの志くけけ
朝あまの志くけけあまの志くけけ

首見
波文
三枝
不
福
自
者
平
有
墨
銭

七言

九

傳せんくりよのくまりのいみまふふ
 天井より毎日のくまなく若き若
 折るうて海苔層々や若葉うけ
 細解るうけさへくう梓まう葉
 葉柳子たうあうり字けおる
 川柳く栞子の遠く羨り可那
 ころりくく遊る社乃志まううふ
 新のくまうり出て買うくく松奥外
 傘かりこより昔のやかあつて
 杜若あつてあちとあやゝ藤巻細
 垣根く新さく出や万念の空
 海舟りくくくくくやあ子細

而 后 蒿 松 春 溪 松 山 暎 連 子 行 之 桂 東 平 振 々 大 素 可 一

濱細や形如くくく 若子の花
 昔は花を自在のふか如きうれ
 人足乃多きさ中くく昔はとふ
 酔ぬり花淋く交るや瓜の昔
 正配まの掃除ほくくや瓜の花
 古中まきまきく悔なきくく初月
 材木を置きまきまきく初月
 酒の中はけのりわけや名の葉
 端をくくくくくく 毛むくく
 辻番がまきまきく梅の啼りくく
 水の流れうて道く各梅乃夢
 ら新さくくくくくく 五月園

春 岐 孫 山 白 兔 文 石 鼓 身 中 幻 芝 春 竹 白 桂 松 隣 宣 妙

七言 別集

十

あふまきあふ神口ぬきすは水く都
 の燈の口所を以て身を居るは
 多難くしてまゝあつてはさう
 ましはくは星移すぬ隠所子
 師のあつては隠したるはさ
 権柄は子腰刀をさすは涼臺
 りあつてあつては蓮の花を
 筆柄は筆をさすは骨を居るは
 川柄は火をさすは舎を
 川柄は火をさすは二乃十
 沖経は筆をさすは利を

比古
 一具
 林曹
 春路
 斗圓
 小簾
 菊所
 一様
 大巢
 荷了
 英山

酒臺の言舟あけり経不形
 くらあつては岸をさすは
 馬鹿な言の言柄をさすは
 吹く陣のつらつはつは
 早苗ぬきつはつはつは
 好く明標の残るはつは
 盾の言をさすはつはつは
 血の言をさすはつはつは
 針立乃手刺をさすはつは
 片や糸をさすはつはつは
 辻中ら曲家の中をさすは

小圃
 桐兩
 梅室
 兩圃
 室圃
 兩圃
 室圃
 兩圃

本身と本撰と名取と一ツれ
云りお月仰向あまもあまきり
つらきるをまきく世世の 又入り
釋 狂いいやふけのよま 出たりのそ
新むらぬ 情わとやま 膝 足
先のまの耕 畑まかまのり
まうのまのそらの 喰くぬき海若
大名の備 あまをまのり ちやとや
岸 穂乃 穂乃 ちやとや ちやとや
鼻のまの ちやとや ちやとや ちやとや
ちやとや ちやとや ちやとや ちやとや
ちやとや ちやとや ちやとや ちやとや

宮 兩 宮 兩 宮 兩 宮 兩 宮 兩 宮 兩

浪子お甲いりけり けりけり
公爺はまの ちやとや ちやとや ちやとや
肝つらきまの ちやとや ちやとや ちやとや
曲線代わりの ちやとや ちやとや ちやとや
あるまの ちやとや ちやとや ちやとや
鳴るまの ちやとや ちやとや ちやとや
頭とありの ちやとや ちやとや ちやとや
肘りまの ちやとや ちやとや ちやとや
福合おわりの ちやとや ちやとや ちやとや
冬おりの ちやとや ちやとや ちやとや
たのまの ちやとや ちやとや ちやとや
美さの ちやとや ちやとや ちやとや

宮 兩 宮 兩 宮 兩 宮 兩 宮 兩 宮 兩

七言 女神乃月如神乃原
如やをぬく庭乃すそ終る角と
字

相 兩

言く代女神乃月如神乃原
まひりれまらきぬ森の下草
柱梁のまたりくも羽織着る
奥よりあふり 人あはさきく
月如舟船の舳先也 吉菘系
啼くすより後々 鳥毛 新くあき
暖くくも坐縁の籠吉くくま
膝くりあれく山毛 身奇弱
煉菓のまき入史の持来あり
西 室 兩 圃 室 圃 室 圃 室 圃

梅はさきくまて 西月あ
方明より思くくまの梅 切老
心志中りくくまをくす 圃
飯をくり運くあれをけさあて
兼木 節より 衣 ぬく 終る
あきくめのまきも無のまきま
兼少をく何くくま 具くくも大後
月急あは思り梅のわらみあは
親のまきかまきみ 出す 着
ひや汗をまきくまのまきく
清きまのけつまき 引くく 髪
舞あはまきく 綱子の火の消る
兩 室 圃 室 兩 圃 室 兩 圃 室 兩 圃 室 兩 圃

舟島ゆふ 舟ゆく 舟ゆく
橋中 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく

宮 兩 園 宮 兩 園 宮 兩 園 宮 兩 園

後のちつと 記 足る 花の
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく

室 兩 園

梅室

舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく
舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく 舟ゆく

室 兩 園 室 兩 園

信々かきす 嘆々 辰空の
 何れも 藤をよみ 糸のえんえん
 町をたふまき 吐くさぬ
 再々 藤の 吐くさぬ
 一ひねる 藤直り 骨 ちり
 孫、教 養う 藤をよみ 骨
 甘子つる 藤 手 骨 冊
 坊 藤をよみ 藤をよみ
 拍々 馬 藤をよみ 藤をよみ
 五 歩 藤をよみ 藤をよみ
 藤 藤をよみ 藤をよみ
 藤 藤をよみ 藤をよみ

圃 兩 室 圃 兩 室 圃 兩 室 圃 兩 室

うら水 藤をよみ 藤 ち 藤 出
 白 藤の 藤をよみ 藤をよみ
 圃の 藤子 藤をよみ 藤 身
 いっめ 藤をよみ 藤をよみ
 藤 酒 藤をよみ 藤 強
 か 事 藤をよみ 藤 天 窓 藤
 妙 藤をよみ 藤 藤 藤
 藤 藤をよみ 藤 藤 藤
 藤 藤をよみ 藤 藤 藤
 藤 藤をよみ 藤 藤 藤
 藤 藤をよみ 藤 藤 藤

圃 兩 室 圃 兩 室 圃 兩 室 圃 兩 室

七言 矢たてし花 葉の 跡の 露のけ
かき 追くす 花の 中め 花の 跡の 露のけ
百 花の 跡の 露の 跡の 露の 跡の
たふ 花の 跡の 露の 跡の 露の 跡の
まめん 跡の 跡の 跡の 跡の 跡の

室 圃 室 圃 室

八 采

採りし 露の 跡の 跡の 跡の 跡の
葉の 跡の 跡の 跡の 跡の 跡の
葉の 跡の 跡の 跡の 跡の 跡の
葉の 跡の 跡の 跡の 跡の 跡の
葉の 跡の 跡の 跡の 跡の 跡の
葉の 跡の 跡の 跡の 跡の 跡の

圃 圃 圃 圃 圃 圃

採りし 露の 跡の 跡の 跡の 跡の
葉の 跡の 跡の 跡の 跡の 跡の
葉の 跡の 跡の 跡の 跡の 跡の
葉の 跡の 跡の 跡の 跡の 跡の
葉の 跡の 跡の 跡の 跡の 跡の
葉の 跡の 跡の 跡の 跡の 跡の
葉の 跡の 跡の 跡の 跡の 跡の
葉の 跡の 跡の 跡の 跡の 跡の
葉の 跡の 跡の 跡の 跡の 跡の
葉の 跡の 跡の 跡の 跡の 跡の
葉の 跡の 跡の 跡の 跡の 跡の
葉の 跡の 跡の 跡の 跡の 跡の

圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃

七言 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃

達共お男 友 弟ら組ある
 一年の跡を 兼 盤々もよつて
 内々すき〜川 好 色めあひ
 常々あやね 習う〜 習のきかうり
 日光曝ハ ぶ 部 あ〜らひ
 気はまきか 以てあつる ぶ 習
 納戸の〜 ちり〜 ちり〜 ちり〜
 以 修長 梓の あり 一 筆 知
 おきめり つ〜 冬 の 阿 知 加
 終舟の 遠入と 妙 姑 ち あり けり
 用 知 志 せ ぐ 用 行 けり あり
 ちり 候 ちり あり ちり あり ちり あり

圃 知 木 圃 采 木 知 采 圃 知 木 圃

修りあ〜 けり 苦 概 ち ちり
 浪泉の 柳 秋 ち ちり けり
 ちり〜 修 長 乃 ちり 過 筆

知 采 圃 木 知 采

引 提 ちり〜 や 大 和 の ちり〜
 志 ちり〜 ちり〜 ちり〜
 無 修 ちり〜 ちり〜 ちり〜

丁 知
 冬 采 木
 八 采 木

ちのささけはふたかりある
 月すくく子孫守りて
 時の鐘撞くは中世のまゝ
 つゆらひよある道
 おく句はたのまほのたつひ
 仕色納一豆乃
 舟戸くくり老るる
 ちりちりおるる娘
 一夏の櫻提つさき
 鞋穿 眼のまつくり
 世にさういふ人
 遣入るるをま

小圃
 木知 圃知 木知 圃知 木知 圃知 木知 圃知

ちりちりおるる娘
 一夏の櫻提つさき
 鞋穿 眼のまつくり
 世にさういふ人
 遣入るるをま
 ちのささけはふたかりある
 月すくく子孫守りて
 時の鐘撞くは中世のまゝ
 つゆらひよある道
 おく句はたのまほのたつひ
 仕色納一豆乃
 舟戸くくり老るる
 ちりちりおるる娘
 一夏の櫻提つさき
 鞋穿 眼のまつくり
 世にさういふ人
 遣入るるをま

圃知 木知 圃知 木知 圃知 木知 圃知 木知

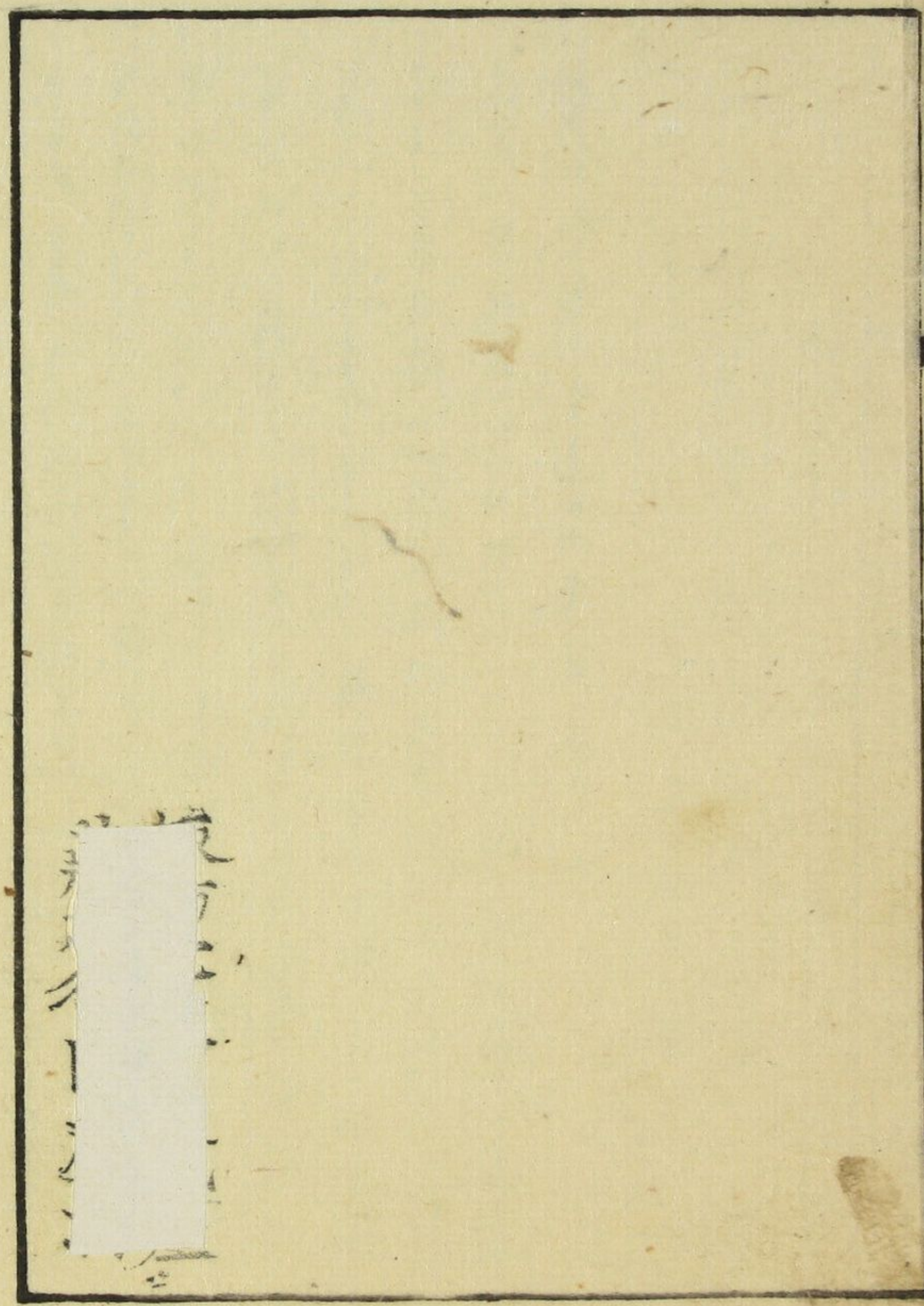
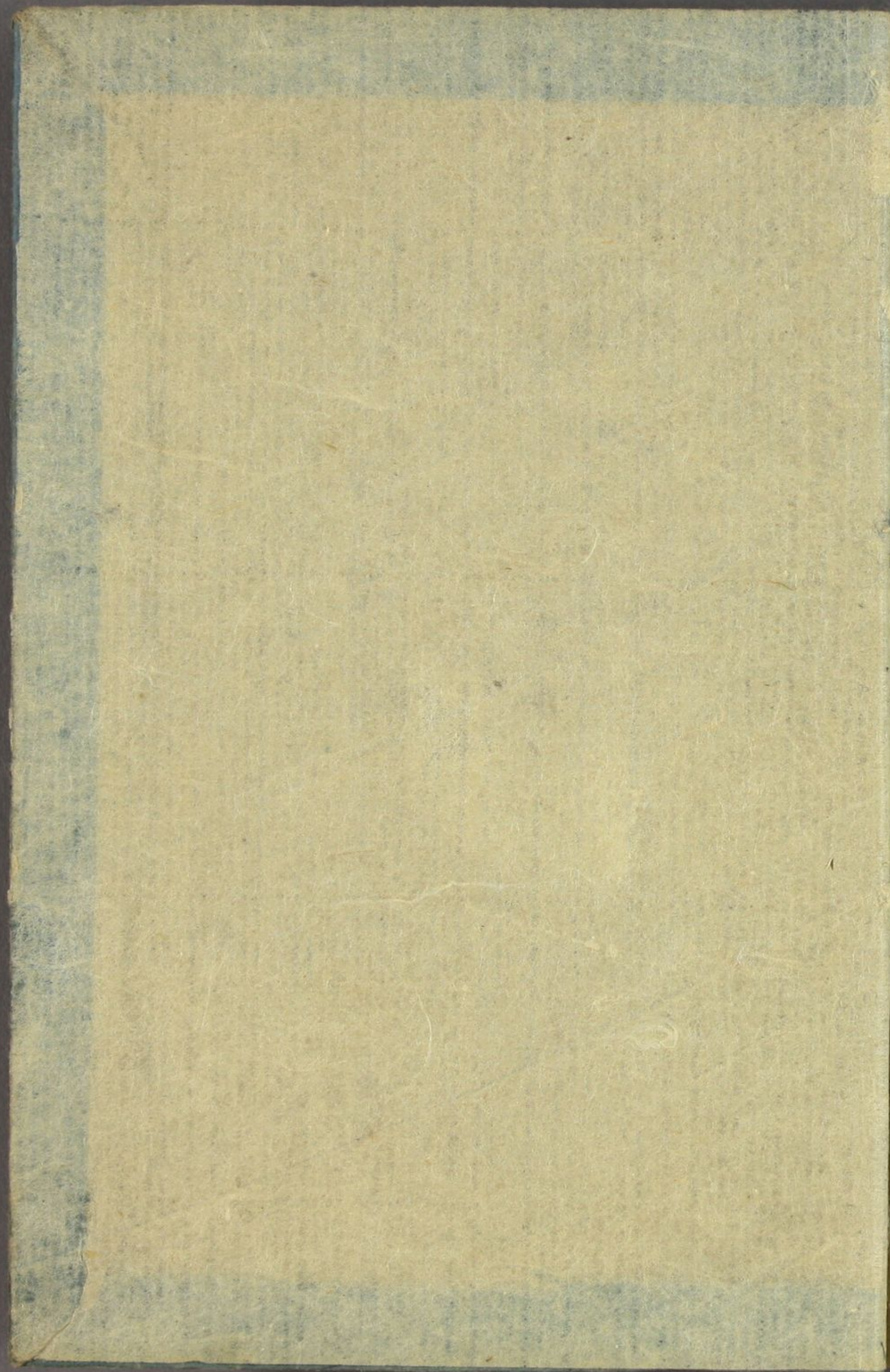
梅枝と竹と挿し免し粒
肉と唇の月ハ九り比々
あらくハ中と秋さ能乃其ぬ
宿とつりけらるる角力取

圃 菜 本 知 菜 圃 知 本 圃

かゝるり菜大根引能市と中紀述書其存とりの白
はさるし時をさるし以てたうかきのの實ハハきかりし

うたかたみりけりささる中とみ能ゆあさるしを免して
日かきさるる其の夜よりハ菜老人中をさるしとさるし
十日をのうにいさるし其さるし天保三年閏十一月十日
高麗人の菜さるしからさるるさるしよち能あはさるし
さるしと其の夜さるるさるしと其の夜さるるさるしと
歸り菜の養ハ四百大根引のす能ハ五百はさるるさるし
すはハ菜老人とさるしとさるしとの能証は能後を其さるし
高麗の菜さるしとさるしとさるしと





七言
詩
卷
之
一

七

